

<授業実践3>「言語文化」読むこと

1 単元名

紀貫之の「女性仮託」について、作品の成立した背景を踏まえて論じる。

2 指導目標

(1) 単元の目標（下線部：関連する学習指導要領の指導事項）

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解することができる。（〔知識及び技能〕(2)のウ）

・作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めることができる。

（〔思考力・判断力・表現力等〕B「読むこと」(1)のエ）

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。（「学びに向かう力、人間性等」）

(2) 言語活動

ア 言語活動

紀貫之の「女性仮託」について、複数の資料や作品の成立した背景を踏まえて論じる。

イ 言語活動のねらい

作品に関連した資料を読み比べることや、作品の成立した背景を踏まえて論じる活動を通して、紀貫之の「女性仮託」について、総合的に評価できるように導きたい。また、作者の執筆意図について複数の文章から読み取ったことを論じるだけではなく、「誰かに仮託して書く」という言語文化について、現代に通じるものがあることを感じ取らせたい。

(3) 教材

ア 教材 『土佐日記』『門出』『亡児』紀貫之（『高等学校言語文化』第一学習社）
『御堂関白記』

イ 教材観

『土佐日記』の中から「門出」「亡児」を取り上げる。いずれの文章も文章量が少なく、古文学習の導入期として自主的に読解をさせることに適している。『御堂関白記』については、当時の男性貴族の書いた「日記」と『土佐日記』を始まりとする「日記文学」との違いを比較することができる良教材であると考えた。記録としての日記とは異なる表現方法と、「女性仮託」をして書いた執筆意図を読み取らせるとともに、仮名で書かれた和文によって創られた新たな文学の価値についても理解させたい。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

生徒にとって魅力ある言語活動にするために、読み取った内容を「本の帯」として表現する活動を試みることにした。「読むこと」における論じる活動について、原稿用紙に書くのではなく、表現する設定を「本の帯」に変えることで生徒の個性が出る作品になることを目指した。相互評価についても、それぞれの書き上げた作品を楽しみながら読み合い、個々の読み取った内容を深め合う活気のある学びの場となることを企図した。

3 観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。	紀貫之の「女性仮託」について、作品に関連した資料を読み比べ、作品の成立した背景を踏まえて論じる活動を通して、他の意見を参考にしながら、積極的に内容の解釈を深め、思いや考えを広げて自らの学習を調整しようとしている。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

ワークシートの記述によって評価する。

イ 思考・判断・表現（読むこと）

作品の記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
作者が女性仮託して『土佐日記』を書いた理由を、学習内容を踏まえて論じている。	本文の内容や【資料】の内容を適切に関連させながら、論じている。	本文の内容や【資料】の内容を踏まえて論じている。	紀貫之が、女性に仮託して『土佐日記』を書いた理由を書いている。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

振り返りプリントの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
相互評価を通して自身の作品の改善点を見いだして考えを深めている（α）。	他の生徒の意見や、他の生徒の作品の優れた点を生かして、自身の作品の改善点を積極的に見いだして考えを深めている。	他の生徒の意見を活かして、自身の作品の改善点を積極的に見いだして考えを深めている。	自身の作品の改善点を見いだしている。
単元を通して学んだことや身に付いたことを今後どのように生かしていくかを見いだしている（β）。	単元を通して学んだことや身に付いたことを今後どのように生かしていくか、言語文化の観点を基にして見いだしている。	単元を通して学んだことや身に付いたことを今後どのように生かしていくかを見いだしている。	単元を通して学んだことや身に付いたことを振り返っている。

※ α・βは、それぞれ「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」とする。

4 単元の指導計画（配当 4 時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点 * 生徒への支援の手だて	評価上の留意点 ◇ 観点 □ 点検・確認 ■ 分析 * 「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 「門出」の読解。 本単元の目標を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを配付し、文法事項や現代語訳をペアで確認させる。 * 文法事項で誤読している場合は、文法書を使うよう指示する。 ろう化表現や諧ぎやく表現が使われていることに気付かせる。 本単元のまとめとして、作者が「女性仮託」をした理由について各自の考えを論じる活動を行うことを確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ (知) □ 「記述の点検」(ワークシート) * できるだけペア同士でサポートさせ、教員は机間指導をして適宜助言を与える。
第2次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 「亡児」の読解。 【資料1】【資料2】の読解。 作者が「女性仮託」をした理由について論じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを配付し、「亡児」や資料から読み取ることが出来る内容をペアで確認させる。 * ペアの助言を参考にさせる。 手順やルーブリックを確認させて書き方に留意させる。 * 本時と前時で使用したワークシートを振り返らせる。 タブレット端末で作品を作成し、ロイロノート・スクール(株式会社 LoiLo、以下「ロイロノート」と表記)の提出箱に提出させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ (思) ■ 「記述の分析」(提出した作品) * 次時の相互評価で他の生徒の作品を参考にさせる。
第3次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 作品の相互評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りプリントを配付し、タブレット端末を使用しながら、4人グループで作品の相互評価をさせる。 * 前時に示したルーブリックを基に相互評価させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ (態) ■ 「記述の分析」(振り返りプリント) * 相互評価表に書かれたアドバイスを基に改善点を考えるように声を掛ける。

	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の改善点を書く。 ・単元の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で代表作品を決めて、作品の優れた点を共有する。 ・相互評価を生かして自身の作品の改善点を考えさせる。 ・自身の作品を自己評価する。 ・全体の振り返りをして、活動を通して学んだことを確認させる。 	<p>*ワークシートや振り返りプリントを確認するように声を掛ける。</p>
--	---	---	---------------------------------------

5 本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

紀貫之の「女性仮託」について、資料を基に作品の成立した背景を踏まえて論じることができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

紀貫之の「女性仮託」について、資料を基に作品の成立した背景を踏まえて論じている。

(3) 本時（3時／4時間）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 (5分)	・本時の学習内容を理解する。	①本時の目標と言語活動について確認する。	①作者が「女性仮託」をした理由について論じることがを理解させる。
展開 ① (15分)	・「亡児」の読解。 ・【資料1】【資料2】の読解。	②本文中の歌について、共通して読み取ることができる心情をペアで確認する。 ③資料について、読み取ることができる内容をペアで確認する。	②亡くした子どもへの思いが歌に詠まれていることを気付かせる。 ③紀貫之の歌人としての業績や、当時の男性貴族が書いた日記の特徴に気付かせる。
展開 ② (25分)	・作者が「女性仮託」をした理由について論じる。	④これまでの学習内容を関連付けながら、本の帯を記入枠として考えを論じる。 タブレット端末で作品を作成し、ロイロノートの提出箱に提出する。	④書く手順やループリックを確認させて書き方に留意させる。 特に、本文の内容や【資料】を関連させながら、総合的に論じることができるように考えさせる。 ■書き上がった作品を「記述の分析」により評価する。
終結 (5分)	・本時の内容を振り返る。	⑤次時は生徒相互で作品を読み比べることを確認する。	⑤次時に向けて自身の作品を改めて読み、改善点はないか考えさせておく。

6 研究の実際と考察

(1) 言語活動 (第2次)

資料の読解については、初見の資料ではあったが、ペアで協力して必要な内容を読み取ることができていた。作品の作成については、設定した字数も少なかったためか下書きまでは時間内に余裕をもって書き上げる生徒が多かった。一方で提出先をロイロノートとしたが、タイピングに不慣れた生徒は完成に時間を要した。

(2) 相互評価 (第3次)

ロイロノートでグループ内の生徒の作品を見て相互評価を行った。他の生徒の作品の「改善点」を書く活動であったが、資料から読み取るべき内容について不足していた点を適切にアドバイスできていた生徒が多かった。ただし、評価規準からはずれた、「本の帯として魅力的なものにするため」のアドバイスも少なからず見られたため、「読むこと」の言語活動としての目標や、ルーブリックが全ての生徒に浸透していなかったことが反省される。

(3) 評価

評価については、研究協議会での助言を参考に「B評価」を要とした上で、「A評価」を突出したものにするべくルーブリックを練った。「思考・判断・表現」の観点の「A評価」については、複数の資料を読解し、適切に関連させて論じることを基準とした。「A評価」に達した作品は全体の一割程度であったが、「亡き子への思い・歌人としての事績・男性貴族の日記との違い・表現の特色」について、適切かつ、総合的に論じることができていた。「主体的に学習に取り組む態度」の観点については、二つの側面に分けて行うクロス評価を実践した。初めての実践であったが、評価のポイントが整理されて評価で悩むことが少なかった。「自らの学習を調整しようとする側面」の「A評価」については、言語文化に関する観点を踏まえた記述を求めた。「A評価」の作品は全体の二割程度で、「誰かに仮託して書く」ことや、「文学の虚構性」等、現代の言語文化に通じる内容について言及するものが見られた。

7 研究の成果と課題

作品に関連した資料を読み比べる上で、今回は授業者が資料を選び提示した。生徒の感想には、「読んだ資料以外にも、作者や作品に関係する資料は他にもないか気になったので探してみたい。」という内容が複数あった。時間や物理的な制約はあるが、図書室の利用や、インターネットでの検索などを通して適切な資料を自ら探すことによって、より主体的な言語活動が可能になるのではないかと考える。

今回の「本の帯」を作る活動を「書くこと」の領域としてアレンジを試みることも可能だと感じた。また、美術科や情報科とコラボレーションして「本の帯」だけではなく、「本の表紙」をトータルプロデュースするという教科横断的な学びも授業デザインとして可能ではないかと考える。

作品の制限字数を百字程度とした。実践前は、字数が少ないことにより、生徒が考えを表現する上で不都合かという懸念もあったが、生徒の取組の様子や、作品の出来具合を見ると適切な字数であったと思われる。字数がそれほど長くなかったことにより、一人の作品に対してゆとりをもって評価することができた。

振り返りプリントを見ると、「これからも自主的に作品の成立背景などを調べて、多角的に作品に向き合いたい」という旨の記述が多く見られた。生徒たちにとっては、「読み比べて論じる」活動は初めてのものであったが、よく考え、よく活動し、作者の執筆意図についての見方・考え方を深めることができた。今後も魅力的な言語活動を取り入れられるよう授業改善を行い、古典的文章や、日本の言語文化に対する学びに向かう力を育成していきたい。